

「献呈の言葉」

2015年04月01日

ルカによる福音書 1章1節～4節。わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていただきたいのであります。

ルカ福音書と使徒言行録はパウロの同伴者ルカが書いたと言われていた。コロサイ書4章14節に「愛する医者ルカ」と記されているから、ルカは医者で、パウロの伝道に同伴し、病弱なパウロを支えたと思われる。しかし、ルカ福音書と使徒言行録を書いたのは医者ルカではない。エイレナイオスが「パウロの同伴者ルカは、パウロの語ったことを福音書に書いた」と記しており、そこから、著者はルカと言われるようになったのであろう。ルカ福音書はパウロの信仰理解とはかなり異なる立場にあり、実際の著者を特定することはできない。著者はイエスの語録(Q)、マルコ福音書、著者自身が持つ特殊資料を駆使して、神の救済史という歴史観に立ってルカ福音書を書いている。主イエスに対する篤い信仰を持って、主イエスの生涯を著し、伝道したいと願うグループ、あるいは個人が書いたものであろう。ルカ福音書と使徒言行録は新約聖書の4分の1を占め、後の教会に大きな貢献をしている。不明の著者を、一応「ルカ」と呼ぶことにしたい。

ルカは、福音書を書き始めるに際し「献呈の言葉」を書いている。「わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。」とあるように、初代教会において、最初から目撃した人々は、主イエスの生涯、そして十字架と復活に関わる出来事について、大きな喜びと感動をもって語り合い、人々に伝えていた。

ルカは主イエスが表した福音を見聞きし、調べた物語を自分らしく新たに著したいと願い、筆を執った。「そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていただきたいのであります。」ルカは「敬愛するテオフィロさま」に「献呈する」と言っている。テオフィロはおそらく実在した人ではなく、架空の人物であろう。そして、テオフィロをローマ人と想定している。ルカはローマ人(異邦人)に伝道したいと思い、福音書を書き始めている。一方、マタイ福音書は、主イエスの福音を旧約聖書の成就として捉え、ユダヤ人に対する伝道を目指している。

初代教会のクリスチャンたちは、あらゆる手立てを用いて伝道したいと、持てる力を尽くしている。彼らは自分の名を残そうなどという野心はない。ひたすら、主イエスを伝えたい熱心さに燃えていた。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つの福音書は、それぞれ自分の立つところから、伝えたい相手に向かって書いている。彼らの無私の奉仕によって、代々の教会は主イエスへの信仰を導かれてきた。彼らの奉仕にただ感謝である。

ルカは、お受けになる教えは確実なものであることを分かっていただきたいと、主イエスに関わる物語は信じるに足る確かなことであると念を押している。